

うのを合図に、お腹がすくまで友達と遊んで家へ帰る毎日だった。学齢が上がると共に宿題が増え、クラブ活動に精を出し、塾などにも通ったおかげで、遊び時間や母と一緒に買出しへ行く機会が減りはしたものの、私の子ども時代は、この食事時間を中心に動いていたのは変わらなかった。

私自身のこの食習慣が、子育ての上にもその影響力を色濃く表したものになった。

長女の離乳食作りに励み、やっと大人と同じ物が食べられるようになってきた矢先、アメリカへ連れてきた。渡米直後、日本の食材が全く手に入らず、肉とサラダ、具がキャベツの味噌汁という子どもの食生活は、私の大きなストレスとなった。3ヵ月後に大学寮へ移り住んだが、幸い、そこには一軒、少しではあるが、なじみの食材を置いたスーパーがあり、私の日常を取り戻せたと、感謝した。

寮生活で様々なお国料理を経験したが、我が家の食生活を日本食と決めたのは、この頃からだったと思う。アメリカの食材や台所道具を使いこなすのにしばらくは四苦八苦したが、できる限り子どもの食生活を豊かにしてやりたいのが親心だ。それに、私自身が子どもの頃に受けた食文化のカルチャーショックを思えば、長女に与える食習慣や食材の言葉も大切な教育と、一生懸命日本食を作った。

こうして食生活のストレスから開放され、私は日々の海外生活に馴染んでいき、子ども達ものんびりとアメリカでの毎日を過ごしていた。そこへ、次女の先生から "Use time wisely" という、難しい宿題を出されて、慌てた。のん気に生活する事が日常化しつつあったその時、先生との面談はタイムリーに私をヒットし、ありがたいアドバイスとなった。

子ども相手のこの宿題を前に、即効果につながるような方法など、全く思いつかなかった。それは、先生の言う "Use time wisely" 自体、私自身に欠けた能力だったからだろう。その意味を理解する上でも、身近な人達からお手本を探してみると、寮時代の親しい友人の、卒業後の生活からその一端をうかがい知る事ができた。子どもの世話をしながら共働きをする友人の生活は、時間を有効に活用する能

力を持っていなければ、成り立たない。彼女達が子どもの何を優先したかは聞かなかったが、親子で決めた事を子どもにきちんと守らせる事が、大切な事ではないかと感じた。

子ども達もまだ小さかったのを幸いに、食生活の習慣づけを "Use time wisely" の「はしら」と決めた。おざなりだった食生活を元へ戻し、毎日朝7時、夕方5時という食事時間を繰り返した。それに学校の時間以外は、遊び、宿題、風呂、稽古、就寝時間など、やらなければならない事は、できるだけ同じ時間に始めるよう、言い聞かせた。子ども達にそれぞれの時間を身体で覚えさせるため、また、朝夕の食事時間をきちんと守らせるため、はしら時計の代わりとなって、子ども達に声をかけ続けた。

今思うに、子育てと言いながら、私自身こそがこの「はしら」が必要だったなあと、感じる。

私が子育ての「はしら」としたものが、"Use time wisely" の役目を果たしたのかどうか、いつか子ども達に聞いてみようと思う。ただ、親の欲目で見ると、自分達の生活に何らかの「はしら」を持たなくては、生活のコントロールが難しいという認識くらいは、身につけたように感じるのだが。いや、そうあってほしいという、親の願望かしら…。

松本康子

まつもとやすこ

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人となった。このコラムでは、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私と子どもの悪戦苦闘の姿を紹介。

編集長から一言

このコラム、なぜか人気があります。

「毎日ファミリー新聞の時から毎回、読んでいますよ」と、教育フェアなどで、お母さんに声をかけられることが多くあります。

実は、出版社の方から「本にしては」、帰国子女教育の先生から「本になったら、必ず買いますよ」といわれ、プレッシャーだったのでしょうか、しばらく筆が止まっていました。しかし、「INFOE」誌になって字数が倍に増え、逆に、ファイト一杯のようです。

おしゃべり同様(?)、具体的な体験談には事欠かないようです。やはり、母は強い。康子さんに脱帽。